

罪人を招くために来たイエス

ルカの福音書 5章 27-32 節

はじめに

今日の聖書箇所は、「**レビという取税人**」がイエス様の弟子となるという出来事が書かれています。同じ出来事が書かれているマタイの福音書では、「レビ」ではなく「**マタイ**」という名前になっています（マタイ 9：9）。ですから、この「レビという取税人」は、新約聖書の一番最初の書物である「マタイの福音書」を書いた「マタイ」のことだと考えられています。彼はイエス様の弟子となる前は、「取税人」であったのです。

「取税人」とは、ユダヤ人たちから税金を集める人です。集めた税金は、ユダヤ人たちのために使われるのではなく、当時イスラエルを支配していたローマ帝国のために使われたのです。取税人は、ユダヤ人でありながら、ローマ帝国に雇われ、ローマ帝国のための税金をユダヤ人たちから集めていたのです。ユダヤ人にとって、ローマ帝国は「異邦人」であり、「汚れた人たち」です。ユダヤ人は、自分たちこそ「神の民」であると思っていました。その神の民である自分たちが、汚れた異邦人のために税金を払うということは納得のいかないことでした。その納得のいかない税金を、ユダヤ人でありながらローマ帝国にへこへこしながら集めている取税人は、同胞のユダヤ人たちからは「裏切り者」と見られ、「異邦人」と同じように「汚れた人たち」と見られていたのです（マタイ 18：17）。

しかも当時の取税人は、同胞のユダヤ人たちから、決められた以上のお金を取り立てたり（ルカ 3：13）、脅し取ったり（ルカ 19：8）していたようです。取税人は、ローマ帝国に決められたお金を納めれば良いのですが、ユダヤ人たちからは決められた以上のお金を取り立てて、自分の懐に納めていたのです。それゆえ、取税人は皆、「金持ち」であったようです（ルカ 5：29、19：2）。ユダヤ人たちは、取税人たちの不正を見抜いていましたけれども、取税人たちの背後にはローマ帝国が付いていました。取税人たちは、ローマ帝国の看板のもとに、ユダヤ人たちを脅して、不正なお金を取り立てていたのです。それゆえ取税人は、今日の聖書箇所の 30 節にもあるように、当時のユダヤ人たちからは、「**罪人**」と同列に置かれていたのです。つまり社会的に「罪深い者」と見なされていたのです。ですから、取税人は、ユダヤ人たちから嫌われ、怖がられ、憎まれ、社会的には見下されていたのです。彼らは完全にユダヤ人の社会から疎外され、差別され、一緒に食事することさえなかったのです。そのような取税人の一人である「レビ」、あるいは「マタイ」がイエス様の弟子となるのです。

1. 取税人のレビを弟子とするイエス

では、レビはどのようにイエス様の弟子となるのでしょうか。27-28節には、こうあります。「その後、イエスは出て行き、収税所に座っているレビという取税人に目を留められた。そして、『わたしについて来なさい』と言われた。するとレビは、すべてを捨てて立ち上がり、イエスに従った」。レビは、自分からイエス様の弟子となったわけではありません。自分でイエス様に「弟子にしてください」と頼み込んで、弟子になったわけではありません。そうではなく、イエス様がレビに声をかけて、弟子となったのです。

では彼は、どのような時にイエス様に声をかけられたのでしょうか。彼は、「収税所に座っている」時に、イエス様に声をかけられたのです。まさに取税人の仕事をしている最中です。ユダヤ人たちを脅して、不正にお金を取り立てている時だったかもしれません。決して、彼が真面目にイエス様の話を聞いている時とかではないのです。全く罪深い生活の只中にいる時に、イエス様はレビに声をかけて、「わたしについて来なさい」と言われたのです。

「わたしについて来なさい」という言葉は、「わたしに従いなさい」という意味で、28節の「イエスに従った」という言葉と同じ言葉が使われています。イエス様はいきなり、罪深い生活の只中にいる取税人のレビに、「わたしに従いなさい」と声をかけられたのです。すると驚くことに、レビは、「すべてを捨てて立ち上がり」、イエス様に従ったのです。ここには、レビの心の動きは全く書かれていません。なぜレビがイエス様に従うようになったのかは分かりません。しかし彼はこの時、すべてを捨てて、イエス様の弟子となったのです。

彼はこの時、「すべてを捨てて立ち上がった」とあります。彼はこれまで「収税所に座っていた」のです。その彼が「立ち上がった」ということは、取税人の仕事を辞めたということの意味しています。彼が捨てた「すべて」とは何を意味するのかは分かりませんが、少なくとも彼はこの時、取税人の仕事を「捨てた」のです。それは、罪深い生活を捨てたとも言えます。イエス様の弟子になるには、二つのことが求められます。一つは、「捨てる」ということです。何も捨てずにイエス様の弟子になることはできません。何かを捨てなければ、イエス様の弟子になることはできないのです。もう一つは、「従う」ということです。イエス様の弟子になるには、イエス様に従うことが求められるのです。

これまでレビは、何に従って生きてきたのでしょうか。ローマ帝国に従ってきたとも言えます。しかしもっと突き詰めれば、彼は「自分の欲望」に従って生きてきたのではないのでしょうか。「お金が欲しい」「金持ちになりたい」という欲望に従って生きてきたのではないのでしょうか。彼はイエス様の弟子になる時、その欲望を捨てたのです。自分の欲望に従って生きるというこれまでの生き方を捨てて、イエス様に従って生きるという新しい生き方をする決断をしたのです。

レビは「立ち上がり」ました。この「立ち上がる」という言葉は、「よみがえる」「復活する」とも訳される言葉です。レビはまさしく、古い生き方に死んで、新しい生き方によみがえり、復活したのです。レビの新しい生き方は、イエス様に従うという生き方です。

「ルカの福音書」の続編となる「使徒の働き」では、「弟子」という言葉は、すべてのクリスチャンを指す言葉となります。つまり、イエス様を信じるすべてのクリスチャンは、イエス様の「弟子」と呼ばれるのです。その意味で、「何かを捨てること」、そして「イエス様に従うこと」は、イエス様を信じるすべてのクリスチャンに求められていることなのです。

2. 取税人レビの盛大なもてなし

さて、28節には、イエス様の弟子となったレビが最初に行ったことが書かれています。「それからレビは、自分の家でイエスのために盛大なもてなしをした。取税人たちやほかの人たちが大勢、ともに食卓に着いていた」。レビは、自分の家でイエス様のために宴会を開くのです。そしてその宴会に、自分の仲間であった取税人たちや罪人たち、そしてイエス様の弟子たちを招いたのです。ここで分かることは、レビは「すべてを捨てた」とありましたが、捨ててないものもありました。一つは、「自分の家」です。彼は自分の家を解放して宴会を開いたのです。大勢の人たちが入る家ですから、おそらく大きな家だったでしょう。彼は自分の家をイエス様のために使ったのです。もう一つ彼が捨ててないものがあります。それは「お金」です。彼は、イエス様をはじめ、大勢の人たちをもてなしたのですから、その食事代のすべてを彼が負担したのです。彼は、自分のお金を捨てたのではなく、イエス様のために使うようになったのです。さらにもう一つ彼が捨ててないものがあります。それは、自分の仲間であった取税人たちや罪人たちです。彼は、イエス様の弟子となったからといって、これまでの仲間との関係を断ち切ったわけではありません。悪い仲間とは縁を切ろうと考えたわけでもありません。むしろ彼は、自分の仲間であった取税人たちや罪人たちに、イエス様を紹介しようとしたのです。

イエス様の弟子となったレビが最初に行ったことは、自分の家を解放して、自分のお金を使って、自分のこれまでの仲間たちにイエス様を紹介することだったのです。やはり彼が捨てたのは、取税人という仕事であり、自分の欲望に従って生きるという古い生き方だったのです。彼は、自分の家やお金や仲間は捨てたわけでもありませんでした。しかしこれまでとは、自分の家やお金の使い方が変わりました。また仲間たちとの接し方も変わりました。彼は、まさに新しい生き方を始めたのです。

3. 罪人を招いて悔い改めさせるために来たイエス

しかし、レビの宴会を見て、小声で文句を言う人たちがいました。それは、30節にあるように、「パリサイ人たちや彼らのうちの律法学者たち」です。「パリサイ人」というのは、「分離する者」という意味です。彼らは、旧約聖書の律法を厳格に守りました。律法を守ることによって、自分たちを「正しい人」と見なしたのです。そして、律法を守らない人たちを、「罪人」と呼び、彼らを自分たちから遠ざけることによって、自分たちを清く保とうとしたのです。ですから彼らは、取税人たちや罪人たちを遠ざけ、彼らと一緒に食事

をすることは決してありませんでした。それなのに、イエス様や弟子たちが取税人たちや罪人たちと一緒に豪華な食事を食べたり、お酒を飲んだりしているのを見て、「**なぜあなたがたは、取税人たちや罪人たちと一緒に食べたり飲んだりするのですか**」と言ったのです。

では、なぜイエス様は、「罪人」と呼ばれる「取税人のレビ」を弟子としたり、取税人たちや罪人たちと一緒に食事をしたりするのでしょうか。31-32節で、イエス様はこう言われます。「**医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人です。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです**」。

医者が必要とするのは、病人です。健康な人は医者が必要としません。同じように、正しい人は、イエス様を必要としません。しかし、正しく生きようと思っても生きられない人、罪人はイエス様を必要とするのです。なぜならイエス様は、魂の医者だからです。イエス様は、罪を扱う医者だからです。

通常の医者は、身体の病を治療したり、精神的な病を治療したりします。しかしイエス様は、魂の病を治療するのです。魂の病は、罪が原因となります。その罪を扱うのが、イエス様であり、教会なのです。罪とは何でしょうか。聖書で言う罪とは、神様の律法に従わないことです。神様の律法の中心は、「神様を愛すること」と「人を愛すること」です。その意味で、「神様を愛さないこと」「人を愛さないこと」こそ、聖書で言う罪の本質なのです。その罪の本質から、虐待やDVなどの家庭問題、いじめや暴力、殺人、不倫や性犯罪、盗み、詐欺、嘘、妬みなどの具体的な悪い行いや犯罪などが生まれてくると聖書は言うのです。聖書は、「**義人はいない。一人もない**」(ローマ 3:10)と言います。つまり、正しい人は一人もない、すべての人が心の中に罪を持っていると言うのです。聖書で言う罪の本質は、「神様を愛さないこと」であり、「人を愛さないこと」です。それはつまり、自分だけ愛することです。言い換えれば、自己中心です。自分を大切にすることは大事なことです。しかし、自分を大切にすることと、自己中心は違います。私たちの社会に起きるあらゆる問題や犯罪は、私たち人間の自己中心から出発しており、それは私たち人間が、神様を愛さず、人を愛さないことに原因があるのです。そして私たち一人ひとりの心の中にも、罪の根っこがあるのだと聖書は言うのです。

私たちの人生を振り返って、自分の行動だけでなく、心の中までもすべて思い巡らした時、「私には罪がない、私は完璧に神様を愛してきた、私は完璧に人を愛してきた」と言える人が、はたしているでしょうか。私は牧師をしています、未だにたくさんの罪を抱えています。自己中心的な性質は、私の全身にこびりついて離れません。神様の栄光よりも自分の成功を求めてしまいますし、人の幸せよりも自分の幸せを求めてしまいます。未だに人と自分を比較して、妬みを覚えることもありますし、人の幸せや成功を素直に喜べないこともあります。人の不幸を見て、自分は大丈夫だと安心することさえあります。私は魂が病んでいるのです。私には魂の医者が必要なのです。私の罪を治療してくれるイエス様が必要なのです。

私たちがもし癌になり、手術が必要になった時、自分自身で癌を癒すことはできませ

ん。自分で身体にメスを入れて、自分で癌を取り除くことはできません。私たちにできることは、医者を信頼することです。医者の説明をよく聞き、医者の言うことに従うことです。病の治療に必要なのは、医者に対する全幅の信頼です。もし、その病を招いた原因が、自分のこれまでの不摂生な生活習慣などが原因であれば、それらを捨てなければなりません。イエス様は、私たちの罪を扱う医者です。イエス様は、私たちの罪が赦されるために、十字架で死なれ、私たちが罪に打ち勝つために三日目によみがえられました。私たちにできることは、これまでの罪の生活に別れを告げ、イエス様に全幅の信頼を寄せることです。「イエス様、私は自分の罪をどうすることもできません。どうか、あなたが私の罪を癒し、私を新しい生き方へと導いてください」と祈ることです。そして、自己中心の生き方から、イエス様に従うイエス様中心の生き方へと方向転換することを決意し、決心することです。

パリサイ人たちや律法学者たちは、自分の罪に気づかず、自分は「健康な人」「正しい人」と思い込んでいました。しかし彼らの罪の病は、確実に進行し、やがてイエス様に対する妬みが膨れ上がり、殺意に変わり、ついにイエス様を十字架につけて殺してしまうことになるのです。罪とは恐ろしいものです。私たちの中にある罪は、決して放置したままにしてはなりません。私たちは、魂の医者であるイエス様のもとに行かなければなりません。イエス様は、私たちの罪を扱うためにこそ来られた救い主であるからです。

おわりに

イエス様は、「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです」と言われました。レビは、社会的に「罪人」と見られている人でした。彼が悔い改めて、イエス様の弟子となったという出来事は、イエス様こそまさに「罪人」のために来られた救い主であることを知らせる出来事となりました。

取税人たちや罪人たちと一緒に食事をしたのは、イエス様だけではありませんでした。イエス様の弟子たちも一緒に食事をしたのです。その意味で、教会も罪人たちと一緒に食事をする所でなければなりません。教会は、「正しい人」の集まりではありません。イエス様によって罪を癒していただき、今もなお罪を抱えながら生きている人たちの集まりです。イエス様の十字架と復活によって、決定的な罪の治療はしていただきましたが、今もなお罪との戦いに生きている人たちの集まりです。しかし教会には、魂の医者であるイエス様が共にいてくださるのです。ですから絶えず罪の治療をしていただくことができます。イエス様はいつも、罪人を招いているのです。